

# 絶對者の顯現

池 上 泰 信

學問知識の最初の起源は疑の念にあると云はれる。「アリストテレス」が「驚駭より學的思索が起る」と言へる如く、天地の運行四季の循環等法界森羅の萬象は一として我をして疑問を發せしめぬものはない。殊に存在及死滅の問題の解決は我々に最も直接の關聯性を持つだけに宗教的、哲學的、藝術的動機を伴つて最も切實に要求される。

今此の疑念を最も原始的狀態に於て内省して見るに「之は何か」と言ふ疑問文によつて表現される如く「何か」と言ふ不安感情によつて分裂された「之は」と言ふ意識が二つ以上の意識の何れに安住すべきかと迷つてゐる不安動搖の心と云へよう。即ちある意識されないそのまゝのままとまつた心的狀態が問ふもの（主）と問はれるもの（客）に分裂した狀態を指すのである。従て疑念の解決とは動搖する意識に安定を與へる事即ち問はれてゐる當の意識が結合すべきものを發見する事である。分裂した意識が再び或る方向に統一された狀態である。然るに普通に心理學者はこの分裂の再統一を以て知覺（統覺）即ち意識狀態と稱してゐるより見れば主客分裂以前のその儘の狀態とも言ふべき直接經驗（又は純粹自我）は毫も知的意志的なと言ふ意識

活動の自覺されてゐない全然無意志的無反省的な心境である。然るに一切の主客對立の意識界は所の直接經驗の自己分裂の所産なる故直接經驗は一切の現實界の生源であり創造者であると言へよう。

普通に我々の常識では知覺し意識する通りのものが外界に實在すると考へてゐる。否客觀界に何物か存在する爲め主觀が之を認識するものと思つてゐるが、我々の表象が實在を模寫すると言ふが表象内容が必ずしも實在その儘の眞を寫してゐるとは考へられない。又この素朴的な實在觀では實在が先づ存して然る後認識が之に次ぐと考へられてゐるがまだ認識しない先に事物が存するとはどうして考へられようか。

然らばこゝに實在てふ觀念に就て再吟味する必要があると思ふ。

所謂眞なる實在とは直接經驗そのものであり所の直接經驗の自己分裂を種々の立場に於て統一する時種々の現實界（意識界自然界）が構成されると思はれる。即ち純なる感じそのもの純なく思惟そのもの、純なる意欲そのもの、それは吾々に最も直接的にして然も主客分裂の反省的立場にゐる限り意識内容として

捕捉されない不漸進行の純なる意識の流れそのものである。然して知的對象界はそのまゝの意識の流れの外に立て纏て見た意識である。「ベルグソン」の語を借りて言へば純粹持續を同時存在の形に直して見る事である。時間を空間の形に直して見る事である。即ち流動發展する直接經驗の自己否定により客觀化され對象化された姿であると言へよう。吾々の所謂科學的世界と言はれるは客觀化された此の知的世界が種々の科學的立場に於て部分的に統一された世界である。

茲に直接經驗的發展形式に自己分裂と部分統一の二段階があるのが見られる。前者は否定的分裂の運動（客觀化の作用）後者は肯定的統一の運動（對象化の作用）である。普通に範疇とはかゝる知的對象界を統一構成する原理に名けられる。例へば空間時間の客觀化的範疇によつて客觀化された直接經驗が因果の範疇によつて統一された時、因果必然の自然界が構成される。

さて是の如き考へ方に立脚する時、認識とが經驗するとは客觀的事象そのまゝを認識するに非ずして却て直接經驗そのまゝを客觀界として認識するのであると言へよう。されば主客分裂する知的反省の立場にたつ限りその認識の對象は範疇によつて構成せられた經驗界にのみ止まり毫も主客未剖のそのまゝの直實在に及ばないのである。之は即ち自ら主客對立の假定の下に知的學問的に實在を攻究する科學の認識能力の限界を示唆するものであると云へよう。

普通に宗教は絕對者に憑依の純なる情と言はれる如く自然界

精神界の因果必然の法則に制約される我々人間が自己を否定して超越的存在に没入する情意的の態度と言へるのであろう。超越的存在とは知的には捕へ得ない意識以前のそのまゝの純我の事であり我とは純我の自己否定により客觀化された現實我を指す宗教的態度は我々に於る純我が自らの否定態から脱して再び自らに復歸せんとする事である。従てそは我々に於る神佛自らの努力なる故煩惱汚染の現實我の中に如來の光明は輝くのを見る。東海の旃陀羅が子としての意識の中に佛使上行の再誕として如來の事を行ずる良醫としての自覺が生れ出る。佛に祈り神に求むると云ふ時、佛や神が外界にあると考へられる限り宗教生活は苦罰の倫理生活即ち意志的生涯である。併し純なる宗教的生活と言はるべきは小なる我は否定し盡されて永遠なる超越的存在に合体融合する事であらう。絕對者の堂奥に參じ我が裏に佛を體驗する事である。須臾の生命に永恒の生を味ふ事である。迷界に沈溺する我は妙覺果滿の佛陀と一如する。

煩惱は即ち喜である。苦惱はそのまゝ、法悦に外ならぬ。阿鼻の叫喚は天界の淨樂と聞えるであらう。

此の如き純境に住する時、知的反省の立場にては捕へ得なかつたそのまゝの眞實在は直下に體驗されるであらう。(高一)